

R I N E T T A

(1)

リネッタはアストグラードはひとりで山道を歩いていった。空は雲ひとつない青空。絶好のハイキング日和。しかしリネッタの心と足取りは重かった。歩みはだんだんゆっくりになっていき、やがて立ち止まってしまった。足が痛くて、その場に座り込みたくなかったが、そうしたら二度と立てなくなってしまうだろう。背中に背負う荷物はずっしりと重い。リュックサックの重みが肩に食い込む。リネッタの兄貴のほうが、とリネッタは思う。リネッタよりも重い荷物を背負っているはずのリスティルの姿は見えない。おそらく、リネッタのだいぶ先を歩いているのだろう。

(こんなはずじゃなかったのに)

今日は一番上の兄サイナスと、二番目の兄リスティル、従兄《いとこ》のウィンズムの四人で刃

葉岳《やいばだけ》にハイキングに来ている。言い出したのはサイナスだった。頂上からの景色が素晴らしいとかそこに山があるからとか何とか。サイナスは大陸百名山制覇にはまっけていて、友人たちと勝負をしているらしい。

そしてアストグラード一族の親交を深めようといとこ達を集めた。たった四人のいとなんだから、と。

そうは言ってもリネッタにとっての従兄はウィンズム一人だけで、あとの二人は兄弟だ。（それはサイナスもリステイルも同じなはずだ）そしてリネッタは、この目つきの悪い銀髪の少年がちょっと苦手だった。いつも無表情でむすつとしていて、自分から話しかけてくることはほとんどない。サイナスやリステイルやリネッタが何度も話しかけるとようやく聞き取りにくい小さな声でぼそぼそと答える。基本的に無口なのだ。リネッタは面白くないのでむやみに話しかけることはしなくなった。コイツ人生何が楽しいんだろう、と他人事ながら心配になっってしまう。それでも一応今回のハイキングの誘いには乗ってきしてくれた。サイナスに無理やりつき合わされているのかもしれないが。

相変わらずのむすつとした顔でスタスタと歩くウインズムは楽しくなさそうに見える。

リネッタはサイナスのやることならきつと楽しいことだろうと信じて疑わなかった。サイナスはいつも明るく楽しい兄だった。そして色々な企画でリネッタを喜ばせてくれる。

二番目の兄リステイルが今日のハイキングに乗り気だったのは少々意外だった。リステイルは明らかにアウトドア派ではなくインドア派で、室内でゆつくりと本を読んでいることが多かった。リネッタは小さい頃から男の子に混じって走り回っていたが、リネッタが外で遊ぼうと誘うとリステイルはいつも「私体力ないですから」とやんわりと断っていた。リネッタはこのマイペースな兄よりは自分のほうが体力はあると思いこんでいた。

そういえば、いつだったか、ワールドアカデミーの一番の親友キリアに言われたことがある。

「リネッタ、自分のこと僕って言うのやめなよ。だから『リネ太』なんてあだ名ついちゃうのよ。せっかく可愛いのに勿体ない」

リネッタは素直に「わかった」とうなずき、それ以来自分のことを僕と言うのをやめた。キリア

の言うことなら間違いない、キリアはいつも真っ直ぐで正しいから。

刃葉岳には二日かけて登る。一日目の今日は四人で朝早く家を出て乗用陸鳥《ヴェクタ》で登山口に向かう。登山口には昼前に到着。ヴェクタを停めて早めの昼食（リステイルの手作り弁当）をとる。それから登り始めて、夕方に第一の山小屋に辿り着くことになっていた。刃葉岳山頂からの景色が拝めるのは明日の昼だとサイナスは言っていた。

リステイルは何故カリネットの二倍くらいの重そうな登山用リュックサックを背負って歩いていた。山道を登りながら、時々「うわあ」と小さく歓声をあげて立ち止まる。

「どうしたの」

「見て下さいリネット。ほら、ウィンズムも」

リステイルはその場にしゃがみこむと、リュックサックの中からハードカバーの重そうなカラー図鑑を取り出してページを繰った。

「ヤイバアサツですよ！ 薄紫色の小さな花が可憐ですねえ」

リステイルは草陰に隠れるようにひっそりと咲く野草に感激の声を上げた。図鑑の一ページを指しながらリネッタを見上げて言う。

「ほら。『キグリス大草本図鑑』と同じでしょう」

「……リステイル。それ逆だ」

図鑑をのぞき込むリネッタの背後で、ウィンズムがボソリとつぶやいた。

「ははっ。たまには外出るのもいいもんだろリステイル」

少し先を歩いていたサイナスが振り返ってリステイルに呼びかける。

「ええ。良いですね」

リステイルはよいしょ、と言って背中中の荷物が重そうに立ち上がった。

「リス兄。それ、何が入ってるの」

リネッタはリュックサックを指して聞いてみた。

「キグリス大草本図鑑が上中下三巻、あとキグリス大樹木図鑑が上下二巻ですよ」

「うわあ。それで山登るの無茶だよりス兄」

「そうでしょうか」

「私の荷物と取り替えっこしよ、ね。私の方が体力あるからさ」

リステイルは断ったが、リネッタは半ば強引にリステイルの荷物を引き受けて背負い、自分の小さなリュックサックをリステイルに押し付けた。

「あーあ。知らねーぞ。最初から飛ばすと後ではてるぞ」

サイナスがニヤニヤしながらリネッタに言う。

「大丈夫だよ、このくらい」

かなり重めの荷物を背負ってリネッタは元気良く坂道を登り始めた。

しかし、サイナスの言う通りだった。サイナス、リステイル、ウィンズム、リネッタの順で歩いてたのだが、リネッタは最後尾でだんだん兄たちの歩くペースについていけなくなってきた。ウィンズムの姿がどんどん遠く離れていく。息が苦しく、足が痛い。

リネッタは完全にひとりぼっちになってしまった。ひとりでとぼと歩いていると、サイナスとリステイルの姿が見えてきた。途中で待っていてくれたのだろう。ウインズムの姿が見えないのは、彼のことからひとりで先に行ってしまったのだろう。

「疲れたでしょう。やっぱり私が持ちますよ、リネッタ」

そう言つてリステイルは図鑑五冊が入ったリュックサックをリネッタから受け取った。リネッタは何も言えずにぜいぜいと息を切らしていた。

自分の荷物が軽くなつても、最初でばててしまったリネッタのペースは上がらなかつた。自分より重い荷物を背負っているはずの兄たちは速い。それに比べて自分は少し登っただけですぐ息が切れて立ち止まって休みたくなる。またあつと言う間にひとりになってしまった。基礎体力の違いをまざまざと見せつけられた。サイナスの兄貴はともかく、リステイルの兄貴にも負けちゃうなんて。

「あれ」

リネッタは目を疑った。登山道のど真ん中で、腕組みして立っている軽装の少年、長めの銀髪を

後ろで一つにくくっている……ウインズム？　彼はサイナスたちよりもさらに先を行っているはずなのだが。

「まさか……待っててくれたの？」

けっこういいところあるじゃんと思しながら、リネッタはウインズムに追いついて聞いてみた。

「……お前を待っていたわけではない」

ウインズムはぽつりと答えた。

「じゃあ何やってるの」

「……」

ウインズムは答えない。

「何やってるの、こんなところで」

リネッタはもう一度聞いてみる。

「……別に何だっていいだろ。お前には関係ない」

「ふーん……」

いつもならちよつとむつとするとところだが、リネッタは言い返す元気もなかったし、コイツはこういうヤツなんだからと割り切っていたので、軽く受け流すことにした。

「……早く行ってやれ。あんまり遅いと過保護のサイナスが心配するぞ」
とウィンズム。

「か、過保護って。っていうか……早く行けるもんなら行ってるって……」

「……疲れたか」

「うん……」

「辛いのか、山登り」

「……」

リネッタは言葉に詰まった。数日前からけっこう楽しみにしていた今日のハイキング。サイナスが「山は良いぞー」と言うものだから。それがどうしてこんなに辛いのだろう。兄たちに置いてい

かれて、ひとりぼっちで坂道を登っているからだろうか。

「ウインズムは楽しい？ 山登り」

リネッタは聞いてみる。

「……わりとな」

ウインズムはそう言つてちよつと笑つた。リネッタはびっくりした。

「……今のお喋りでもう疲れは取れただろう。お前は先に行け」

「ウインズムは」

「もう少ししたら行く」

「何で。ウインズム元気でしょ。一緒に行こうよ」

ウインズムがいつもより多く喋っているのがなんだか嬉しくて、リネッタはそう言つてみた。ひとりぼっちで登るより、コイツと喋りながら登った方が絶対に楽しいに決まっている。

「お前と一緒にには行かない」

「なんで！」

「ひとりで色々考えごとしながら一歩一歩登るのが楽しいんだ」

「……そうなんだ」

リネッタは仕方なく「じゃあ、お先に」と言っけてひとりで歩き始めた。

（アイツ本当にひとりが好きなんだなあ）

こういうのを価値観の違いというのだろうか。

（色々考えごとしながら……なあ。アイツ、本当に日々何考えながら生きているんだろう）

リネッタはウインズムについて色々考えながら一歩一歩山道を登る。

しばらく歩いてからリネッタは振り返った。まだウインズムの姿は見えない。

（アイツが本気出して追ってくるなら私またあつと言う間に抜かされて離されて、またひとりになっちゃうのかあ……）

でも今は、ウインズムは私の後ろにいる。サイナスの兄貴とリスティルの兄貴が前を歩き、ウイ

ンズムは後ろ。私は真ん中を歩いている。三人の姿は見えないけれど、私はひとりじゃない。

突然、踏みしめる地面がふわふわで軟らかいことに気が付いた。木々の明るい緑。やさしい木漏れ日。さわやかな空気。草の匂い。小鳥たちがキュンキュンと鳴いている。

(あれ……何だか楽しい)

息も苦しくない。足取りも軽い。このままどこまでも歩いて行けそう。

(2)

「あつ」

ひとりで山道を登っていたリネッタは小さく呟いて息を吞んでいた。

目の前に、大きな黒い生き物が二本足で仁王立ちになっていた。そいつはリネッタが見上げるほどの大きさで、サイナスより頭ふたつみつつ分は背が高くて、幅もある。足も腕も胴も太い。体中

心にふと灯った、何か明るいあたたかい光。驚いて目を開ける。

——まさか、これは、彼の『力』？

「かなわないなあ」

呟いて、ひとりで声を立てて笑った。

真夜中のお茶会

真夜中の念動力研究所。暗い庭を裏へ回る。所長《レティ》の部屋の窓は明るい。いつものように。窓枠をコンコンと叩く。彼女《レティ》は読んでいた書物から顔を上げて僕を見て息を呑んだ。滅多に見られない表情を見たから僕は満足する。

彼女は僕を中に招き入れてお茶を淹れてくれた。

「どうしたんだ、突然。何かあったのか」

「いや何も」

僕はそう言ってお茶をすすする。いつものように美味しい。

「ただちよつと地上《そと》の空気が吸いたくなつて」

「そうか……」

彼女も少し表情をゆるめて湯飲みに口をつける。

しばらく二人で黙ってお茶を飲んでいた。

「評判は上々？」僕は顔を上げて彼女を見る。

「上々も何も」彼女は小さく息をつく。

「……まあ、お前は地上を救つた英雄、だからな」

「悪くないね」僕は唇の端を持ち上げる。

「弟《アリス》が落ち込んでいたぞ」

「アリス君が？」

久しぶりに聞く懐かしい名前だった。昔は良く「ジュリア姉ちゃんは渡さない」とか何とか言われて決闘を申し込まれてたつけ……。その度に返り討ちにしてやったんだけど。もちろん、大人気ないから本気は出さなかったけど。

「アリスはお前のことを兄のように慕っていたからな」

そうかな、と僕は小さくつぶやいてお茶をすする。

「もっともアリスは、お前と私の仲を勘違いしていたようだが」

「それは光栄だなあ」

「本気で言っているのか？」レティは僕をじっと見つめる。

「アリス君は良いよね」ひとりごとのように僕は言った。

「将来《さき》がすごく楽しみだ。彼、真っ直ぐな目をしている。彼なら目標に向かって真っ直ぐに走れるんだろうな。……僕は道を踏み外してしまっただけだ」

「何を言っている」

「僕は逃げたんだよ」

僕はお茶の残りを飲み干して立ち上がった。

「ご馳走さまレティ。美味しいお茶を有難う。また来ても良いかな」

「いつでも歓迎するが……、リロード、」

レティも湯飲みを置いて立ち上がった。

「弟《アリス》に真実を話してやってはいけなにか？」

「だめ」僕は即答する。

「そうか」

「今は未だだめ。でも……」

僕はレティと手を振って別れる。暗い庭を歩きながら確信に近い思いを抱く。

きっと彼《アリス》とはまた会うことになる。近いうちに。そう遠くない未来に。きっと。

A L I S

(1)

そして彼は来てしまった。僕の許《もと》に。

「お久しぶりです、リロードさん」

「敬語使えるようになったんだね」

僕は彼を見て微笑む。

「敬語くらい毎日使ってます」

実は彼に会ったのは彼ほど「久しぶり」ではない。「あのとき」、僕は彼に会っている。彼は気を失っていたので僕のことを見ていないけれど。僕は見ていた。

「あのとき」は流石の僕もキレた。いくらエンリッジが不死身体質だといっても今度こそ彼《エン

リッジ』も死んだんじゃないかと思った。

「生きてたんですね。こんなところで」

僕は黙って頷く。

「嬉しいです」

「ありがとう。……で、何しに来たのかな？」

彼——アリスは腰に挿した剣を抜き放った。

「決闘を申し込みに来ました」

僕は微笑む。

「言っとくけど、僕とレティは何でもないよ。少なくとも、彼女《レティ》は僕のことを何とも思っていない。……少し残念だけどね」

「姉ちゃんの恋愛事情に口出すつもりはありません」

「わかってる。冗談だよ」

「僕は昔の僕とは違います」

「それもわかつてる。……強くなったな、アリス。すごくすごく強くなった。もう少しで……手に届きそうなところまで来てる」

「……色々、ありましたから」

「うん、そうだね」

そう。色々あって、彼《アリス》は戦う意味のほとんどを失ったはずなのだ。しかし、それでも、それでも戦いをやめないんだね、アリス」

「だってここでやめちゃったら……、意味がないじゃないですか。僕は約束したんです」

彼《アリス》が見据えるもの。それは、まだ遥か彼方にある。彼が自覚しているかどうかはわからないけれど、気が遠くなるくらい、遥か彼方に。

「僕は通過点に過ぎないんだね？」

「はい」

彼は即答した。生意氣。手加減はしてやらないことに決めた。

(2)

「……というわけでアリス君に戦いを挑まれたんだ。彼もだいぶ強くなっただけ、惜しい。まだまだだね。うん、例のところに運んでおいた。眠ってる。早く引き取りに来たほうが良いよ。アリス君は君《キミ》みたいに、不死身体質、じゃないから。放つとくと死んじゃうよ。そしたら僕だって後味悪いし、レティに口きいてもらえなくなるかもしれないし。だからよろしく、エンリッジ」

そして一方的に、通信は切れた。前にもこんなことがあったよなあとエンリッジはため息をつきながらも、例のところへ急いだ。時刻はもちろん真夜中。リロードからの通信はいつも真夜中。嫌がらせなのか。リロードのことだ、わかっていてやっているに違いない。

「うわ——」

世 代 交 代

わたしの目の前には、青銀色の直方体が置いてある。それはガタガタと不穏な音を立てている。コイツとまともに向き合うのも馬鹿らしいので、本棚から適当な本を拾ってきてびっしり埋まった文字を目で追っていた。

わたしの背後で扉が開く音がする。暖かいコーヒーの香り。

「あれ？ まだ起きてたのか」

「あんたこそ」わたしは振り返らずに言う。

「レポート終わんなくてさー。引用文献追っかけてたらキリなくて」

「気持ちわかるけど。読むのって面白いもんね。でも読んでもただじゃレポートは書けないぞ、書かなきゃ」

「お前は締め切りまだ先のはずだろ」

「寝れるもんなら寝たいよ」

わたしはため息をついて、ボタンを押して蓋を閉じる。さっきまでガタガタいていたそいつは大人しくなる。

「あーあ、何度目だろう。何やってるんだろう、時間の無駄だ。こうなるとこの箱、便利なんだか不便なんだか」

「今日のところは終わりにして寝な」

「なんでモノって壊れるんだろう。ほんと無駄だよ。人だって病気になったり怪我したりするし。なんでだろう」

「『フツ』であることを有り難がるためだろ。四、五年使ってて、今まで特に何もなかったことが不思議なくらいだろ、考え方変えりゃあ」

「まあね」

わたしは青銀色の箱を指で軽くはじく。

「そろそろ世代交代かな」

「おつかれさま。」

わたしの目の前に温かいカップが差し出される。わたしは受け取って一口飲んだ。

「ぶはっ何これ。アンタいつもこんなの飲んでるの」

「気合入るんだ」

「寝ろとか言いながらこんな差し出すなんて矛盾してるー」

そこまで言っではたと気がついた。

「つてか、ごめんね。飲んじゃって良かった？ アンタの分だったんでしょ」

「いーよ。もう一杯入れてくる」

と言ってそいつは部屋を出て行った。

わたしはカップの中身を飲み干すと、足元の暖房器具を切って立ち上がった。

マイブックル Lite Book

題 名 ルイン リリース
著 者 沢崎 果菜
発行所 マイブックル (<http://www.mybookle.com>)
Produced by エフ・プラット株式会社
〒 106-0032 東京都港区六本木 6-11-16-404
電話：03-3423-3016
印刷・製本 株式会社明光社

第 1 版発行 2012 年 04 月 30 日

第 2 版発行 2012 年 05 月 03 日

Printed in Japan

本書の内容の一部または全部を無断で複写・複製・転訳・
転載および電子媒体への記録・電送を禁じます。

落丁・乱丁はお取替えいたします。